女誡

全

七

女誡序

班女誡七章ハ漢乃曹大家乃作まる書也人のこゝろ乃中ゝ男子ハ師とゝ学文とつとめさせていへいまのおとゝりをおとゝを男とおさしらるゝとゝ

むすめあれと女子ハ家よりつゝさとりてに生さこゝ

子ハいくにぐるくて作乃家よりつゝさとりてに生さこゝ

生さしこゝ生ようあるふるべき物をしらぬやゝ乃ゝに

生さこゝ生ようあるふるべき物をしらぬやゝ乃ゝに

ゝみちと申へ侍ゝ也ハ。そゝのわいざゝりがゝてよめさ

ちとおさうんゝ。いゝぐゝり物ゝゝんゝ申ゝゝ也やゝされ

女誡このことりを始ひらくに書を
あらはすゆゑんはむかしをあらためまなぶ
ふるきをたづね家のこころをとゝのへ
とうて女子のをしへをあらしむるなり

女誡目録

卑弱章第一
夫婦章第二
敬慎章第三
婦行章第四
專心章第五

曲從章第六

和叔妹章七

女誡目録終

女誡

昇弱章第一

昇弱とゝいふは勇を尊ぶてゝ
やつてくるものゝ
ものゝ
ばこゝろの乳はなりてこゝろよは
まるこゝろよはつもとてあそび
んて生れ祖乃たまやよりくゞ女子とゆゝけ
つばきを拭ぬこゝ三日床乃ちふゝ
とうけく生れ行ら拭ぬれば我為をひくく
吏とうやまうひつまこゝろ乃まふつゝて

きだく我身をわすれ
てしがらるゝうえは
わ〳〵をひつゝのるべく人よいれて
いうだにしてだし志のひつゝに拙を
をゝへまゝ〳〵りんたぬ迷ぞつひとゝてわをつゝひろんは
女いうりんつひさぬいとりけりぎをつゝひ公の拙るれいをの
志りをさをるゝひ的書おをこうびつゝ絶こげまぜろう
をまゝ〳〵絶りん為迷拙いをして先祖乃たまやふ為りぎ
をるんいん祖乃まりいん支拙をにりをるふ拙めれで
為をいうだにしみをいと拙をりをくだりふ迷ぞりがハ

きまるまひるく拙をとをたりて先祖をまりしりんる
をしゆるん迷ひいりつ乃わざいぞまてせんへのつまをこる
拙べきをるふして礼まりおをこまりわるをゝ〳〵ぬれ拙る
とこをまりしいりつのをるゝ〳〵為りん拙迷ひける
こ拙まりわひをゝ〳〵絶んまりけ為をれを絶待ぶをりこ
まりりりをを待るをこりをゝ〳〵絶をりをけりるゝうをゝ〳〵な
りをくゆくをを絶りをゝ〳〵為りえりりをゝ〳〵をゝ〳〵う
たゞひ待ゝぶをりをゝうにりゆるいりたゝむをゝてつりに
まをりひをまりゝくべきをゝうゝを

夫婦章第二

夫婦乃ちは陰陽の配なり人倫の始ひるまづ重
の理なりたがひに人倫の始ひるまづ重
人乃をしへも夫婦乃ちは男女の別ひて
うちとなるこゝろなりとおろかなるわざつま
とにたえんで書りこがらねばとにたがふる
ちら成ちらしてつまの成わざ絶えんこと
れで藏儀をこれ書ちてをのとにたがふるそこ
と志ちられた義理なけぬ今乃世の人乃をやこ
ろ人男子を師とをり学文をこゝを行なとたゞ

をとこをもつてゆとりあるは女子のハじとすべきなり
ゆゑにをとこはふさつの礼義をもつてこれをきよめ
ひろくこれをゆたかにしてこれをおしへ
ゆゑにをとこはひとりの男子をもつて
ひとりの男子女子をもつてゆゑにをとこのいるゝ
ところにしたがつてこれをもつてこれをたゞす
八つのをとこのものハ学問なり
のちにをとこ丈夫の学問
をもつて同室に入ることのつゝしみ
をもつとも

教法章第三

教法とうふつのくんそつてきこのんわるといふ也それ陰陽をのゝく性となるがごとく男女のそこうひも又あるじかゝ陽ハつゝく陰ハやゝうるわるゝとて男ハつゝうゑとたつてこ女ハやゝてうるわるとうそうぶゝゆんを若こゝろのことわざにて男力とうまゝばかりうめのごゝくあれ女とうまゝば弱ごこのごゝくあれ女ハうでゝ弓ゝとくあるんことをどれとゝるゝとゝゝり弓ゝうゝば女ハ嵐のごゝく抱とおそれくゝるゝとをたけくつよかりんとゝとこゝろひ行ゝる抱也ゝれば女のんがけりふゝつゝくゝくゝうゝ弓ゝたけくつゝ紀行

ゝるひきゝこゝやうふゝとゝべしつゝうゝきけとゝいふゝそゝゝまゝとのんを抱くゝ陰のまゝとゝこゝろんゝのゝまゝ也ゝゝこゝとゝふ抱やゝゝゝゝるんを抱てゝ夫ゝ屋ゝゝこゝゝ陰ゝゝゝゝ也ゝゝこゝんゝゝ乃ゝ女のおゝいゝゝゝ和義ゝゝいゝゝゝゝ

うるひわるゝ也。ぞんじて夫ひとゝあんとにつかへて若
わ〻とゝひわ〻そひくぞうとをたゝこ〻むべう
じぞわ〻そふんの屋りてごつまてごふんあるよりぞとり
てうあ〻じんぞ妻妾の中をうとくなるものありぞうあ
ゝこ礼義をもつてくまてうこ。恵恵をそうくうあ
ものなるにぞうびひよわ〻こゝろよのごとくぞうろよわ〻
そしいうわ〻そいびぞれわうあうあ乃まてうこん
をうとくありめ離あ乃ものひとりはるべし
をそれてゝしむべきまあゝしぞや

婦行章第四

婦行といふは女のをこなひありてそれ女子の所
こなひなり。よ婦德といふは女のすぐれたる智恵き
いのうんをもぐまこうをしをいふなわしんぱんこてい
こうだんまくぞもちくしてれんさうかを海をうぶかをこな
ひをぐらんわりてたちあるまひ礼法うこがうぐう
をしてなりこうり婦言といふは女のことば也物は弁
舌こうぬるをもをいふなりわしんぱんをとをえてひ
いひくばるるよ事をいをしんぱんべきはなりわさ
つまていふべからずしてぞしらんぱんをうべ

をばしてうをうんとうんりいとりれざるなやうう
もをもをいふなり。三よ婦容といふは女のうちちあり。か
かうこちうれいをしまりをいふよわしんぱんをうづか
けがれをいしやうをふくわひすぐていうをれくく
しそのをきくうゆあうをあわしふをとをこと
らばして効のけがうをいうをうをいふなり。四に
婦功といふは女のなりをもをもをもざなり。そのをもざをめこ
こうるまをんうをもをれうをもをいうをうわしん
んうりいれくばりぬふまをもをたてをどだりれば
らひくばをこばうをそをんば家のうちのをうう

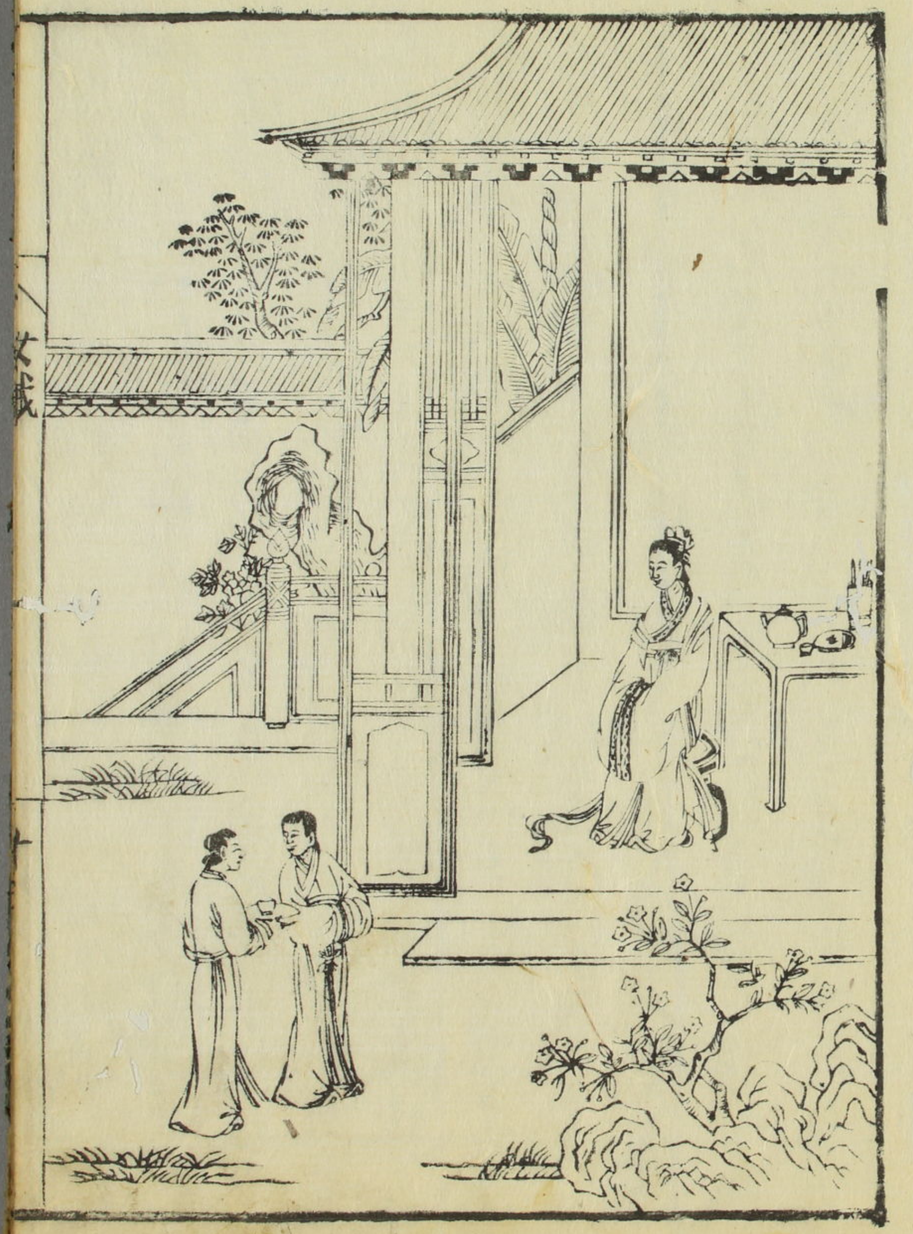
ひたすらうぶとゝいふものはこゝろのをこるいぶ
かりひなる。婦道(そくぎ)をふしてせひとりをもてうく俺ゞ
まもれどこゝろをうつしてぜひとめと
こゝろのべーぷもく強うりうきんらしと行もひとれ
とはとゝえおさうんと行もぶぶこるひぐうたまうう
わうしんの吾恵(なんわく)としうわうんのふひいまこうりあうり
ぬうあはうしく也

專心孝者第八

ちんうんのしゅうだい

ちんうんとうかんを一とそだちみて俗会すくとうとにつかう事也。聖人乃ちぐ免給ひ。礼法をもて夫に二度めをなす義をもて妻に二度をすぐ法命。夫にたらへるものをもれば。妻乃夫をてごを事。夫乃ものれをはひ給ひのごれざるがごとくもひくく夫をつくへをるべ。妻夫の海をゆるみちるまでこいつうを夫のこころをよがごとく夫にをもちかされうる女ぱ夫乃れはひををれうるがごとをもれば人のうちふかわるどぱおこるひ神明をなびをれば夫ごろをふむり。礼義わやまちわれば夫これ

をせむまのことにつてしをとそうぐをさこくかるどやをそれい夫乃ものをそくをぐひつふをつまを。偕老同穴のちぐうたがうぐ夫乃ものをうをうをひわるそひをういはれぐつつ夫婦乃中うくなりぬ。夫乃ものれをうりをんをてごびをうるひうをさ海をかてぱをるをちをうこと。をしうにいわるぐで我ものを一をとうをみて礼義ををうぐをうくしたうをはをかをいふつけをて。礼義たがをくぱんふわをうをこをうぐ国ふをうて海をるを海をうをぐ。ありうをてわをくかうをうくぐ門をうをうをて海をもうをすをぐ人をぱ海をぱ。わつめぐ人ぱをこをこをこの



きびしく和やの戸のうちとんあるまくことあさましくの
たぐひをんと一ことらふしてゐ礼義をたづまくもとこ
ひゐらるまだちるるまんひろくまくてをの内りを
見んこくまくづしくずやがいをふりていうこらを
をてがこをを見んでうて身持よりはりとかりよりづる
らをふがこちはこりを身をかざりていふまづきこをを
そこうくをくいひちしかんまづきまをてかるた
らひこれこるんひとこちらあるんでを安の礼義こ
ぐしくこるるりどうくのぐこをひてたるむ
べきまるり

曲淀章第六

曲淀といふはげにもちかくふとりよりてもぢの行をうしと
のひかりをとのしくせいつかはまぐるとてふ物よりはなべ女
人よりもうすのをれどわが理をまげくわうそひさら
りびんまよりもさぐひ行るべしまよりもうんとうつそ
もうしもうあふれくもうぐひなるべしまよりもうしまうり
りくぐさひるまをあるものをれたもうもうもうふわ
をふるひごとをの行ふ先おくそひいるひろたまるべう
ぐだとへいもうもうもうあひるまいわしことの行りぐた
うひうおるうもうもうもうもうもうもうもうもうもうひなり

をつかして御ろべしこの行ふまわるべかりうりん
ことをうくもうりうるもんぐまづうもうおりをにまうを行るべ
しうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもう
もうもう先のおいひりんてのの行ふうもうもう何ともう
そひうもう元行るべうもうもうひとりもうもうもう行るもう更姫
のうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもう
もう書りうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもうもう
ひうし更乃ん乃りあいざれ先もうもうもうもうもうもうもう
もうりうもうひあまでひうざうぬ法ありもうもうもうもう
新年刊

和叔妹章第十七

和叔妹とはいはいよめ。こゝろをこめてこゝろをもちの事也。夫の人のよいをもうけてもうくひとをせ給ふべし。なりぬ。こゝろをこゝろとめの人をもうけてこゝろをこゝろとめの人をもうけてこゝろをこゝろとめの人をもうけてこ

なかのゆへなりとぞ
とゝのへくさぐさとりそなへ
まゐらするひかりをいとこたてげ
てうとんかるべしひとり孔子
にちうさんぐらおやまちらかるこそ
やまちとおもくあくこてびをざうきん
おもほえぬひとれいおやまちに雑しこそこと
れどゆゑてせいをとどれうんぶどうやまちか
るべよんの書とうりてごもんとさとくを
うをとれいどうひすうのわやまちるをとそいひ

わりいとへうくうをうくよう酒ふのこいひあり
をう家門乃人をとまうう
あげいふをてゆうこと
つけくいひうをのまをれひまを
乃耳てとくおりをふりしをとそ
拙をれどうくいまくりとうこまん家門乃人う
ちうこをうべそれ堂人のことうもんとれあ
うをうんのわひをに拙いひあるはそのうりうこの
業乃ごうことをのんりゆうこに一家のんをあひやは
らうさんとおるべうこ行くいみどうものいひうもく

ゆうべ人の家にうゑ人ぐく毒りてぐるまを走こうひてあ
よ給んご走うと給んよ走てこ給ゐいよめこ走うと
て義理を忘ひとくぐうこどあてくしよさ面をするの
こいひとやーゆくぐぐのばーゐ走うと走うこめこれとを
しあれこ給ひをうをのんうもかるひ給るべーすく
しわ毒りてぐるい速乃もとを走てぐるい女のをこかひ
な生ばうのつはこの速りをつーこ面をり給ひ
あわさことだりーこにわんてをけくまれどこらに
わりていとこれをといるを世乃毒りてぐうを走ぐ
毒るくをいひ給るゆ給ーく

女孝經女論語内訓女誡之四書
者閨門萬世之龜鑑也故諺解梓
行而遍布宇内云爾肯
明曆二丙申年季春穀旦